

ビルマ語の受動構文*

倉部慶太

キーワード：ビルマ語，受動構文，所有者受動文，名詞化接頭辞 ?ă- の脱落条件

1 はじめに

ビルマ語には、以下の例に示すように、動詞 *khàn* 「受ける」を用いて、「被動者がある動作行為を受ける」というような、受動的意味を表す構文が存在する¹。

(1) *θù ?ă-yai? khàn yâ dè.*

3SG NMLZ-beat receive *yâ* REAL

「彼は殴られた」

以下に詳しく記述するが、この構文では、述語動詞 *khàn* 「受ける、耐える」が、主語として被動者である *θù* 「彼」を取り、目的語として名詞化された動詞 *?ă-yai?* 「殴り」を取っている。この文は、「彼は殴りを受けた」、すなわち、「彼は殴られた」という意味を表す。また、上例に示すとおり、この構文では、通常、述語動詞の *khàn* 「受ける」に「不可避」を表す助動詞 *yâ* が付加される。ただし、この助詞の生起は義務的ではない。この助詞を伴わない場合、その文は「自ら進んで V される」という意味を表す (6.2 節を参照)。

この種の文には生産性があり、これをビルマ語における受動構文であると考えることができる。本稿の目的は、このビルマ語の受動構文を対象として包括的な記述と考察を行うことにある。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では、先行研究を概観する。3 節では、本稿で扱う受動構文を規定し、また、この構文における主語および目的語に関して記述する。4 節では、この受動構文が表す意味について述べる。5 節では、受動構文に現れる名詞化接頭辞 *?ă-* の脱落条件に関して考察を行う。6 節では、この構文における主語の有生性、主語の意志性、この構文の使用頻度、名詞化接頭辞の脱落条件、自動詞由来の派生名詞を目的語に持つ受動構文に関して考

* 本稿は筆者が 2009 年 1 月に大阪大学に提出した卒業論文「ビルマ語の受動表現—KHAN YA 構文の記述、分類と意味」に加筆・修正を施したものである。卒業論文を執筆するにあたり、当時の指導教官である大阪大学の加藤昌彦准教授よりビルマ語を含むチベット・ビルマ諸語の専門家としての立場から数々の有益なご意見を頂いた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また、本稿を改訂するにあたり、言語記述研究会の伊藤雄馬氏、稲垣和也氏、大西正幸先生、長田俊樹先生、富田愛佳氏から数多くの有益なご助言を頂いた。心よりお礼申し上げます。

¹ 以下、本稿におけるビルマ語表記は、加藤 (2008) に示される「加藤式表記法」に従い、分かち書きは原則、語単位で行う。先行研究から引用する例文の表記に関してもこの表記法に従うこととする。

察する。最後に、7 節において、類型論的観点からビルマ語受動構文の機能を考察し、より広い視点からこの構文を特徴づける。

2 先行研究

本節では、ビルマ語受動構文に言及のある先行研究を概観する。この構文のみを対象として扱った先行研究は岡野 (2009) のみであるが、ビルマ語の他の文法現象を扱った文献やビルマ語文法を総合的に扱った文献には、この構文に言及のある研究が存在する。本節ではこれらの先行研究も含め、概観する。

Okell (1969) はビルマ語の参照文法である。Okell (1969:162) は名詞化接頭辞 ?ă- によって派生される名詞を目的語として取る動詞のひとつに khàn 「受ける」があることを指摘し、?ă-yai? khàn (NMLZ-beat receive) ‘receive a beating’ という例を挙げている。また、名詞化接頭辞 ?ă- により名詞化された動詞がそれ自身の目的語を取る例として、pá yai? khàn (cheek strike receive) ‘suffer a blow on the cheek’ という例を示している (後者の例は本稿 5.4 節で詳述する)。Okell (1969) はこの現象を指摘した点で先駆的であるが、受動構文に言及した箇所は数行に留まっている。

Wheatley (1982) はビルマ語文法の全体像を取り扱った博士論文である。Wheatley (1982:290–1) は khàn を伴うこの構文は、しばしば ‘passive of adversity’ として振る舞い、意味的な被動者を主語にすると述べるにとどまり、これ以上の詳しい説明は加えていない。

Sawada (1995) はビルマ語の格標識 kò および kâ の用法について考察した論文であるが、同論文の注 14 (p.176) にはビルマ語受動構文に関する言及が見られる。同論文では、この構文の主語が人間名詞句に限定される点 (本稿 6.1 節を参照)、この構文の名詞化された動詞には自動詞も現れうる点 (本稿 6.4 節を参照) が指摘されている。

Okell and Allott (2001) はビルマ語の文法形式を取り扱った辞書である。同書の khàn の項目は、(a) to undergo V-ing (deliberately), to seek, request V-ing, etc; (b) common in pattern ?ă-V khàn yâ ⇒ to undergo V-ing (involuntarily), to be V-ed, to suffer V-ing と説明されている²。そして、ビルマ語文法において、動詞 khàn に関する主要な関心事は ?ă-V khàn yâ というパターンであり、これはしばしば英語の受動 (passive) と対応すると述べ、この種の例を多く提示している。また、Okell and Allott (2001:29) は ?ă-V khàn と ?ă-V khàn yâ の意味的相違点 (本稿 6.2 節を参照)、受動構文に出現する名詞化接頭辞 ?ă- の脱落条件 (本稿 5 節を参照) に関しても言及している。

岡野 (2007) はビルマ語の全体像を取り扱った文法書である。岡野 (2007:130–1) は名詞化接頭辞 ?ă- によって派生される名詞 (?ă-V 名詞) の用法のひとつとして受動構文を取り上げている。同文献は、名詞化接頭辞 ?ă- の脱落条件 (本稿 5 節を参照)、所有者受動文 (本稿 5.4 節を参照)、受動構文の使用頻度 (本稿 6.3 節を参照)、被害の意味を表さない受動構文 (本稿 4.2 節を参照) など様々な点に言及している。

岡野 (2009) は出版された論文の中では、受動構文を対象に扱った唯一の論文である。同論文

² ⇒ の記号は項目の終わり、および、英訳・説明のはじまりを指している (Okell and Allott 2001:xii)。

は、所有者受動文 (本稿 5.4 節を参照)、所有者受動文の動作主の標示 (本稿 5.4 節を参照)、被害の意味を表さない受動構文 (本稿 4.2 節を参照)、受動構文に現れる名詞化された動詞の直前に具格名詞が現れる例 (本稿 5.6 節を参照) など様々な点に言及している。また、同論文はビルマ語の受動構文には様々なバリエーションが認められることを指摘し、名詞化接辞 ?ă- を伴う受動構文、名詞節化標識 tà を伴う受動構文、動詞 thî 「当たる」を伴う受動構文などを記述している。そして、まとめにおいて「ビルマ語の受動表現の研究・調査が困難であるのは、第一にバリエーションが非常に多いことが挙げられる」と述べている。

なお、Judson (1883)、Cornyn (1944)、Stewart (1955)、Cornyn and Roop (1968)、Soe (1999)、澤田 (1999) などのビルマ語文法を総合的に取り扱った文献では受動構文に関しては特に取り上げられていない。

以上、本節では、ビルマ語受動構文に言及のあるいくつかの先行研究を概観したが、本稿と先行研究の相違点に関しては 8 節にまとめて提示する。

3 ビルマ語受動構文

本節では、まず本稿でいうビルマ語の受動構文を概観し、本稿で扱う構文を規定する。次に、この構文における主語および目的語に関して記述する。

3.1 受動構文

本稿で取り扱うビルマ語受動構文とは、(3) のような構文である³。

(2) ?ăphè nà gò yai? tè.

father 1SG ACC beat REAL

「父が私を殴った」

(3) nà ?ăphè yê ?ă-yai? khàn yâ dè.

1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL

「私は父に殴られた」

(2) と (3) は、意味的に能動と受動で対応している。(3) の文について説明する。以下でより詳しく述べるが、この文の述語動詞は khàn 「受ける」である。この動詞が、主語として被動者である nà 「私」を、目的語として名詞化された動詞 ?ă-yai? 「殴り」を取っている (以下では、名詞化接頭辞 ?ă-により派生される名詞を ?ă-V 名詞と呼ぶ)。そして、この動詞 khàn 「受ける」の後には「不可避」を表す助動詞 yâ が現れている。また、動作主名詞句は、名詞化された動詞の直前に属格標識 yê を伴って現れている⁴。(3) の文を直訳すると、「私は父の殴りを受けることになった」というようになる。

³ (2) の例のように、人間名詞句は gò の後で下降調へと変調する。

⁴ 動作主はこれ以外の方法でも標示することができる (5.2 を参照)。

(3) のような構文には生産性があり、この構文はビルマ語における受動的な意味を表す構文であるといえる。以下、本稿では (3) のような構文を「ビルマ語の受動構文」または単に「受動構文」と呼ぶことにする。

ところで、(3) では、受動構文に現れる名詞化された動詞は名詞化接頭辞 ?ă- によって名詞化されているが、以下の (5)、(6) に示すとおり、この動詞は他の名詞化標識によって名詞化されることもある。

(4) *ɲà ?ă-yai? khàn yâ dè.*
1SG NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は殴られた」

(5) *ɲà yai? tà khàn yâ dè.*
1SG beat NMLZ receive yâ REAL
「私は殴られた」

(6) *ɲà yai? chín khàn yâ òi.*
1SG beat NMLZ receive yâ REAL
「私は殴られた」

このように、名詞化にはいくつかの方法が見られるが、本稿では名詞化接頭辞 ?ă- によって派生された派生名詞を持つ受動構文のみを対象とする。なぜならば、(4) に見られる ?ă- による名詞化と (5) と (6) に見られる *tà* および *chín* による名詞化は質的に異なるためである。具体的には、名詞化接頭辞 ?ă- は動詞を名詞化する形式であるのに対して、*tà* および *chín* は節を名詞化する形式である (なお、*tà* と *chín* の相違は文体的なものであり、*chín* は *tà* に対してよりフォーマルな場面で用いられる)。そのため、?ă- による派生名詞を持つ受動構文と *tà* または *chín* による派生名詞を持つ受動構文とでは相違が観察される。例えば、前者では動作主を属格標識を用いて標示しなければ非文となることのあるのに対して、後者では動作主を属格によって標示せずとも非文とはならない。以下のミニマルセットに示すとおりである。

(7)**ɲà ?ăphè ?ă-yai? khàn yâ dè.*
1SG father NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(8) *ɲà ?ăphè yai? tà khàn yâ dè.*
1SG father beat NMLZ receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

(9) *ɲà ?ăphè yai? chín khàn yâ òi.*
1SG father beat NMLZ receive yâ REAL
「私は父に殴られた」

このように、ʔă- による派生名詞を持つ受動構文と tà または chín による派生名詞を持つ受動構文とでは質的な違いが存在するため、本稿ではこれらすべてを同時に取り扱うことはせず、以下では、接頭辞 ʔă- による派生名詞を持つ受動構文を対象を限定して考察を行うことにする。

3.2 受動構文の主語

本節では、受動構文の主語に関して述べる。6.1 節において述べるが、この構文の主語に立つことができるのは人間名詞句のみである。意味的に対応する能動文と比較した場合、受動構文の主語に立つ要素には、次の3種が存在する。

i) 意味的に対応する能動文の目的語

次の受動構文 (11) の主語は、意味的に対応する能動文 (10) の目的語に相当する。このような文についてはすでに 3.1 節で見た。

(10) ʔăphè ŋâ gò yaiʔ tè.

father 1SG ACC beat REAL

「父が私を殴った」

(11) ŋà ʔăphè yê ʔă-yaiʔ khàn yâ dè.

1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL

「私は父に殴られた」

ii) 意味的に対応する能動文の目的語の所有者

次の受動構文 (13) の主語は、意味的に対応する能動文 (12) の目的語の所有者に相当する。この種の文については、5.4 節において詳述する。

(12) ðù ŋâ lɛʔ kò phyaʔ tè.

3SG 1SG.GEN hand ACC cut REAL

「彼が私の手を切った」

(13) ŋà lɛʔ ʔă-phyay khàn yâ dè.

1SG hand NMLZ-cut receive yâ REAL

「私は手を切られた」

iii) 意味的に対応する文の主語

次の受動構文 (15) の主語は、意味的に対応する文 (14) の主語に相当する。この種の文に関しては、6.4 節において述べる。

(14) ŋà ŋaʔ tè.

1SG be.hungry REAL

「私は飢えた」

- (15) *ŋà ʔǎ-ŋaʔ khàn yâ dè.*
 1SG NMLZ-be.hungry receive yâ REAL
 「私は飢えさせられた」

3.3 受動構文の目的語

受動構文に現れる名詞化接頭辞 *ʔǎ-* によって名詞化された動詞は、述語動詞 *khàn* 「受ける」の目的語であると考えられる。その根拠は、この種の名詞化された動詞に対格標識 *kò* (*gò*) を付加することが可能であるためである⁵。例えば、以下の例では *ʔǎ-V* 名詞である *ʔǎ-yaiʔ* 「殴り」は対格 *kò* による標示を受けている。

- (16) *ŋà θù yê ʔǎ-yaiʔ kò khàn yâ dè.*
 1SG 3SG GEN NMLZ-beat ACC receive yâ REAL
 「私は彼に殴られた」

この *ʔǎ-V* 名詞は、次の例のように文頭に置くことも可能である。

- (17) *θù yê ʔǎ-yaiʔ kò ŋà khàn yâ dè.*
 3SG GEN NMLZ-beat ACC 1SG receive yâ REAL
 「彼に私は殴られた」

4 受動構文の意味

本節では、受動構文が表す意味について述べる。まず、4.1 節で「被害」の意味を表す受動構文について述べ、どのような動詞が *ʔǎ-V* 名詞に来るとこのような意味であると解釈されやすいかを見る。次に 4.2 節で、広い意味での「利益・恩恵」の意味を表す受動構文について述べ、どのような動詞が *ʔǎ-V* 名詞に来るとこのような意味であると解釈されやすいかを見る。

本節の内容は、エリシテーションにより得られた結果に基づいている。筆者は、どのような動詞が受動構文の *ʔǎ-V* 名詞になりうるかを調べる目的で、大野 (1983) に収録される 6,000 語中の全動詞について受動構文の *ʔǎ-V* 名詞になりうるか否かをコンサルタントに尋ねた。なお、この調査ではテスト・フレームとして *ʔǎ-V khàn yâ dè* を用いた。

4.1 被害の意味を表す受動構文

ここでは、「被動者が何らかの被害を受ける」という「被害」の意味を表す受動構文を見る。このような意味を表すと解釈されやすいのは、*θaʔ* 「殺す」、*yaiʔ* 「叩く」、*móun* 「憎む」のような動詞に由来する *ʔǎ-V* 名詞を持つ受動構文であるが、本来「被害」とは関係しない *pyó* 「言う」のような動詞に由来する *ʔǎ-V* 名詞を持つ受動構文も「被害」の意味を帯びる。したがって、こ

⁵ 本稿では、動詞の項のうち、*kò* を付加しうる名詞句を目的語であると考えておく。なお、ビルマ語には目的語という文法関係を設定する必要はないという考えもある。その場合、*kò* は目的語を標示するのではなく、動詞の項のうち主語項ではない項、すなわち「非主語項」を標示する標識であるとされる (Sawada 1995)。

の構文のデフォルトの意味は「被害」であると考えられる。例えば、以下のペアにおいて能動文が被害の意味を帯びないのに対して、受動構文では被害の意味が加わっている。

(18) *θù n̄â gò pyó dè.*

3SG 1SG ACC tell REAL

「彼は私に言った」

(19) *n̄â θù yê ?ă-pyó khàn yâ dè.*

1SG 3SG GEN NMLZ-tell receive yâ REAL

「私は彼にひどく言われた」

他動性という観点から分類して示すと、「被害」の意味を表す受動構文の ?ă-V 名詞になりやすい動詞には、次のような動詞がある (この分類は便宜的な分類である)。

a.1 対象に働きかけて対象を変化させるもの

khwé 「割る」 *khou?* 「切る」 *chèhmóun* 「砕く」 *chó* 「折る」 *phè* 「削除する」 *phé* 「裂く」 *phyó* 「崩す」 *phyε?* 「壊す」 *phyau?* 「消す」 *phya?* 「切る」 *θa?* 「殺す」 など

(20) *n̄â ?ă-phya? khàn yâ dè.*

1SG NMLZ-cut receive yâ REAL

「私は切られた」

a.2 対象に働きかけるが、対象に変化をもたらさないもの

kai? 「噛む」 *kàn* 「蹴る」 *kháin* 「命じる」 *si?* 「調べる」 *swε?* 「干渉する」 *shwé* 「引く」 *hpín* 「いじめる」 *hpa?* 「挟む」 *tàin* 「訴える」 *tóunpyàn* 「仕返す」 *twè* 「攻める」 *tai?* 「ぶつかる」 *tún* 「押す」 *mé* 「尋ねる」 *hnâunçε?* 「妨げる」 *hnìn* 「追い出す」 *hni?* 「沈める」 *hne?* 「打つ」 *phán* 「捕まえる」 *yai?* 「殴る」 *lai?* 「追う」 *wáin* 「囲む」 など

(21) *n̄â ?ă-phán khàn yâ dè.*

1SG NMLZ-catch receive yâ REAL

「私は捕まった」

a.3 対象に対する積極的な心的態度を表すもの

kêyê 「けなす」 *khà* 「拒む」 *cizá* 「からかう」 *cháun* 「覗く」 *cwá* 「威張る」 *chau?hlân* 「脅す」 *su?swé* 「責める」 *shù* 「叱る」 *shé* 「罵る」 *n̄â* 「騙す」 *n̄ín* 「否定する」 *tε?khau?* 「舌打ちする」 *thìn* 「思う」 *hnáin* 「比べる」 *mănàlà* 「嫉妬する」 *mê* 「忘れる」 *mê* 「顔をしかめる」 *móun* 「憎む」 *yì* 「笑う」 *yànŋó* 「恨む」 *çou?châ* 「批判する」 など

(22) *n̄â ?ă-kêyê khàn yâ dè.*

1SG NMLZ-mock receive yâ REAL

「私はけなされた」

4.2 利益・恩恵の意味を表す受動構文

ここでは、広い意味での「利益・恩恵」の意味を表す受動構文について見る。先行研究においても、このような意味を表す受動構文が存在することは知られていたが、どのような動詞がこの種の受動構文になるかという点に関して調査した文献はない。筆者は大野 (1983) 収録の 6,000 語中の全動詞を対象に調査し、どのような動詞の場合に「利益・恩恵」の意味を表す受動構文と解釈されるかを調べた。その結果、「利益・恩恵」の意味を表す受動構文は意味的に次の 2 種にまとめられることが判明した。ひとつは、「受け手が何らかの名誉ある行為を受ける」という意味を表す受動構文である。もうひとつは、「受け手が援助・救助を受ける」という意味を表す受動構文である。なお、このような「利益・恩恵」の意味を表す受動構文は、「被害」の意味を表す受動構文よりも相対的に少ない。

4.2.1 「受け手が何らかの名誉ある行為を受ける」という意味を表す受動構文

「受け手が何らかの名誉ある行為を受ける」という意味を表していると解釈されやすいのは、chímwán「ほめる」や ?á kó「頼る (< 力 + 頼る)」、ywé「選ぶ」のような動詞に由来する ?ǎ-V 名詞を持つ受動構文である。このタイプの動詞を意味的に分類すると次のようになる (なお、ここでの動詞分類と次の 4.2.2 節で示す動詞分類は便宜的な分類であり、それぞれの項目は必ずしも互いに排他的というわけではない)。

b.1 ほめる b.2 頼る b.3 選ぶ b.4 好む b.5 尊ぶ b.6 その他

b.1 ほめる

chíchú「ほめる」 chímwán「ほめる」 hmyau?「お世辞を言う」 tànbó phyá?「評価する (< 価値 + 切る)」

- (23) òù ?ǎ-chíchú khàn yá dè.
3SG NMLZ-praise receive yá REAL
「彼はほめられた」

b.2 頼る

kánhlán「申し入れる」 sèhlu?「派遣する」 táun「頼む」 táunshò「頼む」 tàinbìn「相談する」 méin「命じる」 yòuncì「信じる」 ?á kó「頼る (< 力 + 頼む)」 ?á thá「頼る (< 力 + 置く)」 kòzá phù「代表する (< 代理 + する)」

- (24) myànmanàinngàn tai?kùndò ?ágázámè ?ǎphyi? ?á thá khàn yá dè sósomyá
Burma taekwondo player as power put receive yá REAL.ATTR PSN
「ミャンマー国のテコンドーの選手として頼りにされているソーソーミャ」 (MT)

- (25) le?ywézin phyi? pí nau? tǎhni? hmà bé pyàinbwé
player become SEQ after one.year LOC only game

sèhlu? khàn gē yā dà bà.
 dispatch receive PAST yā REAL.NMLZ POLITE
 「選手になった後、1年だけ試合に派遣されたのだ」(MT)

b.3 選ぶ

ywé「選ぶ」 ywékau?「選ぶ」 ywéchè「選ぶ」 θa?hma?「認める」 kau?hnou?「抜粋する」 chíhmyîn
 「昇進させる」 tìnmyau?「推薦する」 pheï?「招く」 gòun pyû「名誉を讃える (< 名誉 + する)」
 shû chà「賞を授ける (< 賞 + 落とす)」 shû chíhmîn「表彰する (< 賞 + 授与する)」 mē?si câ「目
 をつける (< 目 + 落ちる)」 hma?tán tìn「記録に留める (< 記録 + 置く)」 θùgáun pyû「爵位を授
 与する (< 貴族 + する)」

(26) dàbèmé θù ?ǎ-ywé mǎ-khàn yā bú khǎmyâ. hèrìpyínzá shò dē ?átánǎ
 but 3SG NMLZ-elect NEG-choose yā NEG SFP PSN call REAL.ATTR student
 ?ǎ-ywé khàn yā dē. ?ǎ-ywé khàn yā hmà phô.
 NMLZ-elect receive yā REAL NMLZ-elect receive yā IRR.NMLZ SFP
 「でも彼は選ばれなかったのですよ。ヘリーピンザーという生徒が選ばれた。当然選ば
 れるでしょう。」(Myâθántín)

(27) cǎnò hà tèlibéçín gâ tǎshîn pòhlu? khàn yā dē
 1SG TOP television ABL via send receive yā REAL.ATTR
 pǎθāmázóun lù phyi? dō hmà.
 first person become INCHO IRR.NMLZ
 「私はテレビを経由して送られた最初の人物となるだろう」(CL)

b.4 好む

cai?「好む」 cìnnà「慈しむ」 chi?「愛する」 nán「キスする」 pópán「求愛する」 mei?shwè phwê
 「仲良くする (< 友人 + 組む)」

(28) myànmanàinngàn thàinnàinngàn nē mei?shwè phwê khàn yā dē.
 Burma Thai COM friend unite receive yā REAL
 「ミャンマー国はタイ国と友好にさせられた」

b.5 尊ぶ

cìpò「敬愛する」 mya?nó「尊ぶ」 gǎdô「拝む」 lézá「尊敬する」 ?ǎyò?ǎthè pyû「尊敬する (< 尊
 敬 + する)」 ?ǎlé pyû「敬礼する (< 尊敬 + する)」

(29) míndóunmín òi lùdú ?ǎ-cìpò khàn yā òu phyi? θi.
 PSN NOM citizen NMLZ-respect receive yā person be REAL
 「ミンドン王は民衆から敬愛された人であった」

b.6 その他

shóunmâ 「諭す」 cézú tìn 「感謝する (< 感謝 + 置く)」 täyá hó 「説教する (< 説法 + 説く)」 ?ätü yù 「まねる (< まね + 取る)」

(30) ñà myâmyâ gò kùni lô cézú tìn khàn yâ dè.

1SG PSN ACC help because thank put receive yâ REAL

「私はミヤミヤを手伝ったので感謝された」

4.2.2 「受け手が援助・救助を受ける」という意味を表す受動構文

このような意味を表していると解釈されやすい受動構文は、kù 「手伝う」、pyûzû 「世話する」、khwései? 「手術する」のように、「援助・救助」の意味を表す動詞由来の ?ă-V 名詞を持つ受動構文である。このような動詞は、意味的に概ね次の4つに分類できる。

c.1 援助する c.2 救助する c.3 世話する c.4 治療する

c.1 援助する

kù 「手伝う」 kùni 「手伝う」 kùni pé 「手伝う (< 援助 + 与える)」 thau?pân 「援助する」 mäsâ 「支える」

(31) shínyé dè lù shò yìn kùni pé khàn yâ dè.

be.poor REAL.ATTR person say if help give receive yâ REAL

「貧しい人というのであれば助けられる」

c.2 救助する

kè 「助ける」 kèzè 「助ける」 kètìn 「助け出す」

(32) yè ni? ðù ?ă-kè khàn yâ dè.

water drown person NMLZ-rescue receive yâ REAL

「溺れている人が助けられた」

c.3 世話する

pyûzû 「世話する」 yûyà 「優しくする」 gǎyû sai? 「注意を払う (< 注意 + 立てる)」

(33) nè mǎ-káun yìn gǎyû sai? khàn yâ dè.

live NEG-be.good if care set.up receive yâ REAL

「元気がないと心配される」

c.4 治療する

khwései? 「手術する」 shé kù 「治療する (< 薬 + 治療する)」 shé thó 「注射する (< 薬 + 刺す)」

shé tai 「薬を飲ませる (< 薬 + 飲ませる)」 shé thê 「薬を塗る (< 薬 + つける)」

- (34) cǎnò gá khwései?kúθâ khàn yâ môlò pyàn là dà bà
 1SG NOM surgerize receive yâ because return come REAL.NMLZ POLITE
 「私は手術を受けなければならないので帰って来たのです」(Myâθántín)

4.3 本来の意味と異なる意味を帯びる場合

いくつかの動詞は受動構文において用いられるとき、意味的に対応する能動文と異なる意味を帯びることがある。このような例の場合、この受動構文は意味的に対応する能動文を持たないことになる。以下にいくつかの例を示す。

- (35) θù ñâ gò hpa? tè.
 3SG 1SG ACC interleave REAL
 「彼は私を挟んだ」

- (36) ñâ ?ǎ-hpa? khàn yâ dè.
 1SG NMLZ-interleave receive yâ REAL
 「私は金を巻き上げられた」

- (37) ñâ ñân dè.
 1SG be.inferior REAL
 「私は劣っている」

- (38) ñâ ?ǎ-ñân khàn yâ dè.
 1SG NMLZ-be.inferior receive yâ REAL
 「私は降服させられた」

- (39) ñâ ñi? dè.
 1SG be.dirty REAL
 「私は汚い」

- (40) ñâ ?ǎ-ñi? khàn yâ dè.
 1SG NMLZ-be.dirty receive yâ REAL
 「私は不当に扱われた」

5 名詞化接頭辞 ?ǎ- の脱落条件

本節では、受動構文に現れる ?ǎ-V 名詞に付加される名詞化接頭辞 ?ǎ- が脱落しうることを示し、この接頭辞がどのような場合に脱落するかという点を中心に考察を行う。

すでに、先行する節においていくつかの例を示したが、受動構文における名詞化接頭辞 ?ǎ- は特定の環境において脱落しうる。例えば、以下の (41) に対して、(42) では名詞化接頭辞 ?ǎ- の脱落が観察されるが、この文は非文とはならない。

(41) ɲà ʔǎ-shéshò khàn yâ dè.
 1SG NMLZ-abuse receive yâ REAL
 「私は罵られた」

(42) ɲà shéshò khàn yâ dè.
 1SG abuse receive yâ REAL
 「私は罵られた」

上記の最小対は同一の意味を表し、名詞化接頭辞 ʔǎ- の有無は意味に全く影響を与えない。

(42) に示すとおり、名詞化接頭辞 ʔǎ- は脱落することがあるが、どのような場合にでも脱落するわけではない。例えば、以下の例は (42) と同じ形態素を含む ʔǎ-V 名詞を持つが、名詞化接頭辞 ʔǎ- を脱落させると、(44) の例に示すように非文となる。

(43) ɲà ʔǎ-shé khàn yâ dè.
 1SG NMLZ-abuse receive yâ REAL
 「私は罵られた」

(44)*ɲà shé khàn yâ dè.
 1SG abuse receive yâ REAL
 「私は罵られた」

5.1 先行研究: Okell and Allott (2001)

Okell and Allott (2001:29) は、受動構文における ʔǎ-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔǎ- の脱落条件として、次の2点を挙げている (岡野 2007:130 でも同様の条件が挙げられている)。

- [I] when the V has two syllables;
- [II] when it is closely linked to a preceding N.

[I] は受動構文の ʔǎ-V 名詞となる動詞が二音節である場合である。Okell and Allott (2001:29) は以下のような例を提示している。

(45) kêyê khàn yâ ðì.
 mock receive yâ REAL
 ‘to be mocked’

(46) òùmá ʔì luʔlaʔ chín gò thîpá khàn yâ ðì.
 3SG GEN be.free NMLZ ACC infringe receive yâ REAL
 ‘to have her freedom infringed’

- (47) θú ʔăhlâ gò chímwán khàn yâ dè.
 3SG.GEN beauty ACC praise receive yâ REAL
 ‘to be praised for her beauty’

Okell and Allott (2001:29) は動詞が二音節である場合と規定しているが、以下の例に示すとおり、二音節以上の動詞の場合でも接頭辞 ʔă- は脱落しうる。そのため、より正確には「動詞が二音節以上の場合に脱落する」と規定すべきであろう。ただし、複合語を除くと、ビルマ語の動詞の大部分は一音節か二音節から成るため、単純語に限れば、事実上、二音節語が最も長い語である場合が多い。以下の例の ʔă-V 名詞の V は、khwé「割る」、seiʔ「切り分ける」、kû「治す」、θâ「整える」、という 4 つの形態素からなる複合語である。

- (48) ɲà khwéseiʔkûθâ khàn yâ dè.
 1SG surgeonize receive yâ REAL
 「私は手術された」

筆者の調査によると、大野 (1983) に掲載される動詞の中で受動構文の ʔă-V 名詞になり、かつ、二音節から成る動詞は 95 語あったが、そのうち 94 語において名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうることが判明した。調査した語のうち、唯一の例外は niʔnà「苦しむ」であり、筆者の調査協力者によるとこの動詞では名詞化接頭辞が通常は脱落しないということであった。ただし、他の話者によると、この動詞においても他の二音節動詞と同様、ʔă- は脱落しうると判断された。したがって、ʔă-V 名詞の V が二音節以上の場合に名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうるという観察は極めて正確であるといえる。

次に [II] の条件に関して述べる。この条件に該当する例として、Okell and Allott (2001:29) は以下の例を提示している。

- (49) lù móun khàn ði.
 person hate receive REAL
 ‘to incur odium (hated from people)’

- (50) lù myìn khàn ði.
 person see receive REAL
 ‘to allow oneself to be seen’

- (51) ʔăθiʔăhmaʔ pyû khàn yâ ði.
 recognition do receive yâ REAL
 ‘to be recognized’

- (52) shû chíhmín khàn yâ òi.
 prize award receive yâ REAL
 ‘to be awarded a prize’

Okell and Allott (2001:29) は例を示すに留めているが、[II] の条件は [I] の条件に比べて曖昧であると思われる。第一に、ʔǎ-V 名詞に先行する名詞 (preceding N) にはどのような名詞があるか検討する必要がある。上記の Okell and Allott (2001:29) による例に見られる ʔǎ-V 名詞に先行する名詞は同質ではなく、動作主や対象などが含まれている。第二に、緊密に結びつく (closely linked) という表現が曖昧である。この点に関して、本稿では ʔǎ-V 名詞とそれに先行する名詞が複合語を成すかという観点から考察を行う (5.8 節を参照)。

このように、Okell and Allott (2001:29) による規定は必ずしも十分ではないように思われる。岡野 (2009:126) では「ʔǎ-V 名詞は接頭辞 ʔǎ- がしばしば脱落する。しかし脱落の環境については詳しいことは分かっていない」と述べられているが、この指摘はこの点を指しているものと思われる。

以下、本節では [II] の条件に関してより詳しく検討し、名詞化接頭辞 ʔǎ- が脱落するのは「ʔǎ-V 名詞の直前に主格で現れる名詞 (句) が生起する場合」であることを示す。そして、この種の ʔǎ-V 名詞の直前に生起しうる主格で現れる名詞 (句) には概ね以下の 6 種類があることを明らかにする。

1. 主格で現れる動作主 (5.2 節)
2. 三項動詞の ʔǎ-V 名詞の対象や着点 (5.3 節)
3. 主語の所有物 (5.4 節)
4. 熟語の名詞要素 (5.5 節)
5. 道具を表す名詞句 (5.6 節)
6. 起点を表す名詞句 (5.7 節)

5.2 動作主

3 節で示したとおり、受動構文における動作主名詞句は、ʔǎ-V 名詞の直前に現れる。この構文における動作主名詞句の表し方には、以下の三通りの方法が観察される。

- [a] 属格標識 yê による動作主の標示
- [b] 下降調による動作主の標示
- [c] 主格による動作主の標示

[a] は、属格標識 yê を用いて動作主を表す方法である。この方法では属格の動作主名詞句が ʔǎ-V 名詞を修飾する形式をとる。以下のような例である。

(53) ṇà ʔăphè yê ʔă-yai? khàn yâ dè.
 1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
 「私は父に殴られた」

(54) òù màunmàun yê ʔă-θa? khàn yâ dè.
 3SG PSN GEN NMLZ-kill receive yâ REAL
 「彼はマウンマウンに殺された」

[b] は、動作主名詞句の語末音節の声調を下降調にして動作主を表す方法である。ビルマ語において、この種の下降調への変調は属格標識 *yê* と同じ機能を持つ。したがって、[b] の方法は先に見た [a] の方法と本質的には同等であるといえる。[b] の方法により標示された動作主を持つ例には以下のような例がある。

(55) ṇà ʔăphê ʔă-yai? khàn yâ dè.
 1SG father.GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
 「私は父に殴られた」

(56) òù màunmâun ʔă-θa? khàn yâ dè.
 3SG PSN.GEN NMLZ-kill receive yâ REAL
 「彼はマウンマウンに殺された」

[c] は、動作主が何の標識も伴わずに ʔă-V 名詞の直前に現れる例である。本稿では、この種の格標識を伴わずに出現する名詞句を主格で現れる名詞句と呼ぶことにする。以下のような例が観察される。

(57) ṇà khwé ʔă-kai? khàn yâ dè.
 1SG dog NMLZ-bite receive yâ REAL
 「私は犬に噛まれた」

(58) ṇà ká ʔă-tai? khàn yâ dè.
 1SG car NMLZ-hit receive yâ REAL
 「私は車にひかれた」(岡野 2009:137 一部改変)

以上、動作主の標示方法として [a] から [c] を挙げた。これらの動作主の標示方法は等質というわけではない。以下のように、置き換えが不可能である場合があるという事実がそれを示唆している。

(59) ṇà òù yê ʔă-tai? khàn yâ dè.
 1SG 3SG GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
 「私は彼にぶつかられた」

(60)*ŋà ká yê ʔǎ-tai? khàn yâ dè.

1SG car GEN NMLZ-hit receive yâ REAL

「私は車にひかれた」

(61) ŋà θù ʔǎ-kai? khàn yâ dè.

1SG 3SG.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL

「私は彼に噛まれた」

(62)*ŋà khwê ʔǎ-kai? khàn yâ dè.

1SG dog.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL

「私は犬に噛まれた」

(63) ŋà lù ʔǎ-móun khàn yâ dè.

1SG person NMLZ-hate receive yâ REAL

「私はひとに嫌われた」(Okell and Allott 2001:29 一部改変)

(64)*ŋà ʔédi lù ʔǎ-móun khàn yâ dè.

1SG that person NMLZ-hate receive yâ REAL

「私はその人に嫌われた」

以下、この使い分けに関して述べ、[a] および [b] の方法の使い分けには動作主の有生性が関与的であり、一方、[c] の方法は動作主の指示性が関与的であるという考えを示す。

まず、[a] の方法は基本的に動作主が人間であれ動物であれ、その動作主を標示することが可能である。ただし、動作主が動物である場合、その動作主を [a] の方法によって標示するとやや不自然であると判断されることもある。また、[a] の方法により無生物の動作主を標示すると容認不可能であると判断される。

(65) ŋà θù yê ʔǎ-kai? khàn yâ dè.

1SG 3SG GEN NMLZ-bite receive yâ REAL

「私は彼に噛まれた」

(66) ŋà khwé yê ʔǎ-kai? khàn yâ dè.

1SG dog GEN NMLZ-bite receive yâ REAL

「私は犬に噛まれた」

(67)*ŋà ká yê ʔǎ-tai? khàn yâ dè.

1SG car GEN NMLZ-hit receive yâ REAL

「私は車にひかれた」

一方、[b]の方法で標示可能な動作主は人間名詞に限られる。これは受動構文にのみ見られる制約なのではない。下降調により属格を標示することができるのは人間名詞のみであり、動物などの非人間名詞はそもそも下降調を用いて属格を標示することができないためである (e.g., **khwê ch̀idau?* (dog.GEN-leg) 「犬の足」、**ká béin* (car.GEN-wheel) 「車のタイヤ」)。以下の例に示すとおりである。

(68) *ŋà θù ʔǎ-kai? khàn yâ dè.*
 1SG 3SG.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
 「私は彼に噛まれた」

(69)**ŋà khwê ʔǎ-kai? khàn yâ dè.*
 1SG dog.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
 「私は犬に噛まれた」

(70)**ŋà ká ʔǎ-tai? khàn yâ dè.*
 1SG car.GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
 「私は車にひかれた」

以上の議論をまとめると、次表のようになる。

表1 [a] および [b] の方法による動作主の標示法

	人間	動物	無生物
属格 <i>yê</i>	yes	yes	no
下降調	yes	no	no

[a] および [b] の方法には動作主の有生性が関与的であったが、[c] の方法は動作主の有生性ではなく、動作主の指示性が関与的であるように思われる。以下の例に示すとおり、[c] の方法による標示は動作主が人間であれ動物であれ無生物であれ可能であるため、[c] の標示法に有生性が関与するとは考えられない。

(71) *ŋà lù ʔǎ-moun khàn yâ dè.*
 1SG person NMLZ-hate receive yâ REAL
 「私はひとに嫌われた」 (Okell and Allott 2001:29 一部改変)

(72) *ŋà khwé ʔǎ-kai? khàn yâ dè.*
 1SG dog NMLZ-bite receive yâ REAL
 「私は犬に噛まれた」

(73) ɲà ká ʔǎ-tai? khàn yâ dè.

1SG car NMLZ-hit receive yâ REAL

「私は車にひかれた」

[c] の標示法の使い分けに関与的であるのは、動作主の指示性であると思われる。次の例を上記の例と比較されたい。

(74)*ɲà ʔédì lù ʔǎ-móun khàn yâ dè.

1SG that person NMLZ-hate receive yâ REAL

「私はその人に嫌われた」

(75)*ɲà ʔédì khwé ʔǎ-kai? khàn yâ dè.

1SG that dog NMLZ-bite receive yâ REAL

「私はその犬に噛まれた」

(76)*ɲà ʔédì ká ʔǎ-tai? khàn yâ dè.

1SG that car NMLZ-hit receive yâ REAL

「私はその車にひかれた」

このように、指示性が高い名詞句は、[c] の方法では標示することができず、上述の [a] または [b] の方法により標示されなければならない。以下の例に示すとおりである。

(77) ɲà ʔédì lù yê ʔǎ-móun khàn yâ dè.

1SG that person GEN NMLZ-hate receive yâ REAL

「私はその人に嫌われた」

(78) ɲà ʔédì khwé yê ʔǎ-kai? khàn yâ dè.

1SG that dog GEN NMLZ-bite receive yâ REAL

「私はその犬に噛まれた」

なお、上述のとおり、動作主が無生物の場合は [a] および [b] の方法により標示することが不可能であるため、無生物であり、かつ、指示性が高い動作主は、受動構文の動作主として現れること自体が不可能である。以下の例を参照されたい。

(79)*ɲà ʔédì ká yê ʔǎ-tai? khàn yâ dè.

1SG that car GEN NMLZ-hit receive yâ REAL

「私はその車にひかれた」

以上示したとおり、受動構文の動作主の標示には動作主の有生性および指示性に関与的であり、受動構文における動作主の標示法は非常に複雑であるが、これまでの議論を総合すると次表のようになる (括弧内の数字は根拠となる例の番号を示し、*は容認不可能であることを表す)。

ビルマ語の受動構文

表 2 受動構文における動作主の標示法

	人間		動物		無生物	
	+ 指示的	- 指示的	+ 指示的	- 指示的	+ 指示的	- 指示的
属格 yê	(77)	(80)	(78)	(66)	*(79)	*(67)
下降調	(55)	(81)	*(82)	*(69)	*(83)	*(84)
主格	*(74)	(71)	*(75)	(72)	*(76)	(73)

上表を埋める上で必要であり、上記の例にまだ現れていない組み合わせを含む例を以下に補充しておく。

(80) ṇà lù yê ʔă-móun khàn yâ dè.
 1SG person GEN NMLZ-hate receive yâ REAL
 「私はひとに嫌われた」

(81) ṇà lù ʔă-móun khàn yâ dè.
 1SG person.GEN NMLZ-hate receive yâ REAL
 「私はひとに嫌われた」

(82)*ṇà ʔédi khwê ʔă-kai? khàn yâ dè.
 1SG that dog.GEN NMLZ-bite receive yâ REAL
 「私はその犬に噛まれた」

(83)*ṇà ʔédi kâ ʔă-tai? khàn yâ dè.
 1SG that car.GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
 「私は車にひかれた」

(84)*ṇà kâ ʔă-tai? khàn yâ dè.
 1SG car.GEN NMLZ-hit receive yâ REAL
 「私は車にひかれた」

以上、受動構文における動作主の表し方には、三通りの方法があることを見た。これらの方法のうち、[c]の方法で動作主が標示される場合、一音節であるにも関わらず、ʔă-V 名詞を形成する名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。言い換えれば、[a] および [b] の方法で動作主が標示される場合は、名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しない。この点は以下に示す例により実証される。

- (85) ɲà lù ʔǎ-móun khàn yâ dè.
 1SG person NMLZ-hate receive yâ REAL
 「私はひとに嫌われた」(Okell and Allott 2001:29 一部改変)
- (86) ɲà lù móun khàn yâ dè.
 1SG person hate receive yâ REAL
 「私はひとに嫌われた」
- (87) ɲà khwé ʔǎ-kai? khàn yâ dè.
 1SG dog NMLZ-bite receive yâ REAL
 「私は犬に噛まれた」
- (88) ɲà khwé kai? khàn yâ dè.
 1SG dog bite receive yâ REAL
 「私は犬に噛まれた」
- (89) ɲà ká ʔǎ-tai? khàn yâ dè.
 1SG car NMLZ-hit receive yâ REAL
 「私は車にひかれた」
- (90) ɲà ká tai? khàn yâ dè.
 1SG car hit receive yâ REAL
 「私は車にひかれた」
- (91) ɲà ʔǎphè yê ʔǎ-yai? khàn yâ dè.
 1SG father GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
 「私は父に殴られた」
- (92)*ɲà ʔǎphè yê yai? khàn yâ dè.
 1SG father GEN beat receive yâ REAL
 「私は父に殴られた」
- (93) ɲà ʔǎphê ʔǎ-yai? khàn yâ dè.
 1SG father.GEN NMLZ-beat receive yâ REAL
 「私は父に殴られた」
- (94)*ɲà ʔǎphê yai? khàn yâ dè.
 1SG father.GEN beat receive yâ REAL
 「私は父に殴られた」

5.3 三項動詞の ?ă-V 名詞の対象や着点

以下の (95) において、?ă-V 名詞の直前に現れる名詞句 *yízàsà* 「恋文」は、三項動詞の ?ă-V 名詞の対象 (theme) に相当する。これは、*pé* 「与える」という三項動詞の 2 つの目的語のうち一方が、?ă-V 名詞の直前に現われているものと考えられる。意味的に対応する能動文の例を (96) に示しておく。

- (95) *ŋà yízàsà ?ă-pé khàn yâ dè.*
 1SG love.letter NMLZ-give receive yâ REAL
 「私は恋文を渡された」

- (96) *θù ŋà gò yízàsà pé dè.*
 3SG 1SG ACC love.letter give REAL
 「彼は私に恋文を渡した」

この種の名詞句が ?ă-V 名詞の直前に出現する場合、語幹動詞が一音節であるにも関わらず、?ă-V 名詞を形成する名詞化接頭辞 ?ă- の脱落が起こりうる。以下の例を参照されたい。

- (97) *ŋà yízàsà pé khàn yâ dè.*
 1SG love.letter give receive yâ REAL
 「私は恋文を渡された」

以上のような、三項動詞の対象に相当する名詞句が ?ă-V 名詞の直前に現れる例としては、他にも以下のような例が観察される。

- (98) *ŋà shé ?ă-thó khàn yâ dè.*
 1SG medicine NMLZ-pierce receive yâ REAL
 「私は注射された」

- (99) *ŋà dăzei? ?ă-kha? khàn yâ dè.*
 1SG mark NMLZ-stamp receive yâ REAL
 「私はレッテルを貼られた」

- (100) *ŋà bóun ?ă-cé khàn yâ dè.*
 1SG bomb NMLZ-scatter receive yâ REAL
 「私は爆撃された」

- (101) *ŋà yè ?ă-pe? khàn yâ dè.*
 1SG water NMLZ-pour receive yâ REAL
 「私は水を掛けられた」

(102) ɲà mí ʔǎ-ɕô khàn yâ dè.
 1SG fire NMLZ-burn receive yâ REAL
 「私は火をつけられた」

(103) ɲà myiʔtà ʔǎ-pô khàn yâ dè.
 1SG love NMLZ-send receive yâ REAL
 「私は祈りを捧げられた」

ʔǎ-V 名詞の直前に現れる三項動詞目的語の意味役割は、以上に例示したような対象だけではなく、以下の例のように三項動詞の着点 (goal) に相当する名詞句である場合も観察される。

(104) ɲà thàun ʔǎ-châ khàn yâ dè.
 1SG jail NMLZ-drop receive yâ REAL
 「私は投獄された」

(105) ɲà yè ʔǎ-hniʔ khàn yâ dè.
 1SG water NMLZ-sink receive yâ REAL
 「私は水に沈められた」

これらの例に関しても、語幹動詞が一音節であるにも関わらず、ʔǎ-V 名詞を形成する名詞化接頭辞 ʔǎ- の脱落が起こりうる。以下の例に示すとおりである。

(106) ɲà shé **thó** khàn yâ dè.
 1SG medicine pierce receive yâ REAL
 「私は注射された」

(107) ɲà dǎzeiʔ **khaʔ** khàn yâ dè.
 1SG mark stamp receive yâ REAL
 「私はレッテルを貼られた」

(108) ɲà bóun **ɕé** khàn yâ dè.
 1SG bomb scatter receive yâ REAL
 「私は爆撃された」

(109) ɲà yè **pɛʔ** khàn yâ dè.
 1SG water pour receive yâ REAL
 「私は水を掛けられた」

(110) ɲà mí **ɕô** khàn yâ dè.
 1SG fire burn receive yâ REAL
 「私は火をつけられた」

(111) *ŋà myiʔtà pō khàn yâ dè.*
 1SG love send receive yâ REAL
 「私は祈りを捧げられた」

(112) *ŋà thàun chā khàn yâ dè.*
 1SG jail drop receive yâ REAL
 「私は投獄された」

(113) *ŋà yè hniʔ khàn yâ dè.*
 1SG water sink receive yâ REAL
 「私は水に沈められた」

ただし、以下の例に示すとおり、固有名詞が *ʔă-V* 名詞の直前に現れる場合は、この接頭辞 *ʔă-* の脱落は起こらないようである。

(114) *θù ʔìnsèin ʔă-pō khàn yâ dè.*
 3SG PLN NMLZ-send receive yâ REAL
 「彼はインセイン刑務所に送られた」

(115)**θù ʔìnsèin pō khàn yâ dè.*
 3SG PLN send receive yâ REAL
 「彼はインセイン刑務所に送られた」

なお、接頭辞 *ʔă-* の脱落とは無関係ではあるが、本節で扱ったタイプの文では、基本的に、動作主を明示することはできない。動作主を明示すると、極めて不自然な文である判断される。以下の例に示すとおりである。

(116) *ʔŋà yízàsà θù yê ʔă-pé khàn yâ dè.*
 1SG love.letter 3SG GEN NMLZ-give receive yâ REAL
 「私は彼に恋文を渡された」

(117) *ʔŋà θù yê yízàsà ʔă-pé khàn yâ dè.*
 1SG 3SG GEN love.letter NMLZ-give receive yâ REAL
 「私は彼に恋文を渡された (の意味では不自然)」

5.4 主語の所有物

以下の (118) においては、*ʔă-V* 名詞の直前に現れる名詞句は、主語の「所有物」に相当する (所有物には身体部位も含まれる)。意味的に対応する能動文を (119) に例示する。

(118) ɲà lɛʔ ʔǎ-phyáʔ khàN yâ dè.
 1SG hand NMLZ-cut receive yâ REAL
 「私は手を切られた」

(119) ʈù ɲâ lɛʔ kò phyáʔ tɛ.
 3SG 1SG.GEN hand ACC cut REAL
 「彼は私の手を切った」

この種の例では、語幹動詞が一音節であるにも関わらず、ʔǎ-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔǎ- が脱落しうる。以下に示すとおりである。

(120) ɲà lɛʔ **phyáʔ** khàN yâ dè.
 1SG hand cut receive yâ REAL
 「私は手を切られた」

ʔǎ-V 名詞の直前に主語の所有物に相当する名詞句が現れる例として、他にも次のような例が観察される (なお、(125) と (126) のように、所有物には抽象物も含まれる)。

(121) ɲà ɲwè ʔǎ-θéiN khàN yâ dè.
 1SG money NMLZ-confiscate receive yâ REAL
 「私は金を没収された」

(122) ɲà kòunbǎni ʔǎ-pàinsi khàN yâ dè.
 1SG company NMLZ-own receive yâ REAL
 「私は会社を乗っ取られた」

(123) ɲà zǎbìn ʔǎ-hpaʔ khàN yâ dè.
 1SG hair NMLZ-cut receive yâ REAL
 「私は髪を切られた」

(124) ɲà gáun ʔǎ-yaiʔ khàN yâ dè.
 1SG head NMLZ-beat receive yâ REAL
 「私は頭を殴られた」

(125) ɲà bàθàyé ʔǎ-phihneiʔ khàN yâ dè.
 1SG religion NMLZ-oppress receive yâ REAL
 「私は宗教を抑圧された」

(126) ɲà khǎyíθwálgwín ʔǎ-peiʔpìn khàN yâ dè.
 1SG entry.permission NMLZ-prevent receive yâ REAL
 「私は入国を妨げられた」

以上例示した文においても、語幹が一音節であるにも関わらず、ʔă-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔă- が脱落しうる。以下に示すとおりである。

- (127) ɲà ɲwè θéin khàn yâ dè.
 1SG money confiscate receive yâ REAL
 「私は金を没収された」

- (128) ɲà zăbìn hpaʔ khàn yâ dè.
 1SG hair cut receive yâ REAL
 「私は髪を切られた」

- (129) ɲà gáun yaiʔ khàn yâ dè.
 1SG head beat receive yâ REAL
 「私は頭を殴られた」

ところで、名詞化接頭辞 ʔă- の脱落とは無関係ではあるが、上述したような文は、日本語 (松下 1930、工藤 1990、Shibatani 1990、仁田 1992、)、朝鮮語 (李 1979、Shibatani 1990、鷺尾 1997、生越 2008、鷺尾 2008)、モンゴル語 (梅谷 2008、鷺尾 2008)、漢語 (Shibatani 1990、鷺尾 2008) などにも観察され、「所有者受動」や「持ち主の受身」などと呼ばれている。本稿においても、本節において例示してきたビルマ語の例を所有者受動文と呼ぶことにする。

ビルマ語の所有者受動文は日本語の所有者受動文ほど生産的に形成することができない。所有者受動文の許容範囲が日本語より限定的であることは、朝鮮語やモンゴル語の所有者受動文にも当てはまる (生越 2008、梅谷 2008)。ビルマ語の所有者受動文の許容範囲が限定的であることは次の例によって示される。次の文で ʔă-V 名詞の直前に現れる名詞句は主語の所有物であると考えられるが、この文は容認度が低い不自然な文であると判断される。

- (130) ʔɲà ʔeiʔ ʔă-kàn khàn yâ dè.
 1SG bag NMLZ-kick receive yâ REAL
 「私は鞆を蹴られた」

このように、ビルマ語の所有者受動文は許容範囲が限定的であり、主語の所有物であればどのような場合でも成立可能であるわけではない。では、どのような場合に所有者受動文が成立するのであろうか。本節の残りの部分ではこの問題について考察を行う。

第一に、所有物が身体部位である場合は、所有者受動文の容認度が高いといえる。例は (118)、(124)、(131)、(133) などの例がある。所有物が身体部位の場合に所有者受動文が成立しやすいという事実は様々な言語に観察されるものである。この特徴は、例えば、朝鮮語 (Shibatani 1990、生越 2008)、モンゴル語 (梅谷 2008)、漢語 (Shibatani 1990) などの所有者受動文にも当てはまることが指摘されている。

このように、ビルマ語において所有物が身体部位である所有者受動文の成立条件には問題がないのであるが、所有物がものである場合、所有者受動文の成立条件が複雑化する。まず、以

下の各ミニマルペアを比較すると、所有物がものである所有者受動文は容認度が低いことが分かる。

(131) ɲà chidau? ʔǎ-nín khàn yâ dè.
1SG foot NMLZ-tread receive yâ REAL
「私は足を踏まれた」

(132) ʔɲà sàʔou? ʔǎ-nín khàn yâ dè.
1SG book NMLZ-tread receive yâ REAL
「私は本を踏まれた」

(133) ɲà bai? ʔǎ-yai? khàn yâ dè.
1SG belly NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は腹を殴られた」

(134) ʔɲà ʔei? ʔǎ-yai? khàn yâ dè.
1SG bag NMLZ-beat receive yâ REAL
「私は鞆を殴られた」

このように、所有物がものであるとき、所有者受動構文が許容されにくい場合があるが、このような例がまったく不可能であるというわけではない。例えば、以下の例は容認可能であると判断される。

(135) ɲà ɲwè ʔǎ-θéin khàn yâ dè.
1SG money NMLZ-confiscate receive yâ REAL
「私は金を没収された」

(136) ɲà ʔèin ʔǎ-phyɛ? khàn yâ dè.
1SG house NMLZ-break receive yâ REAL
「私は家を破壊された」

以上の例に示すとおり、所有物がものである所有者受動文には容認度が高いものと低いものがあるが、本稿では、所有物がものである所有者受動文の成立条件として、以下のふたつの条件が組み合わさる場合に、この種の所有者受動文が成立しやすいのではないかと考えたい。それは、i) 所有物が所有者にとって重要なものであり、かつ、ii) それが状態変化を被る場合である。この考えの根拠となる例を以下に示す。

次の例は、所有物の重要性が低く、また、所有物は状態変化も被らない。この例の容認度は低い。

- (137) ?ɲà tù ?ǎ-nín khàn yâ dè.
 1SG chopstick NMLZ-tread receive yâ REAL
 「私は箸を踏まれた」

次の例は、所有物の重要性が低い、所有物が状態変化を被る。この例の容認度は低い。

- (138) ?ɲà tù ?ǎ-chó khàn yâ dè.
 1SG chopstick NMLZ-break receive yâ REAL
 「私は箸を折られた」

次の例は、所有物の重要性が高い、所有物は状態変化を被らない。この例の容認度は低い。

- (139) ?ɲà ká ?ǎ-kàn khàn yâ dè.
 1SG car NMLZ-kick receive yâ REAL
 「私は車を蹴られた」

次の例は、(139)と同様に車が所有物であるが、この文の容認度は高い。この例は、所有物の重要性が高く、かつ、所有物が状態変化を被る点に特徴がある。

- (140) ɲà ká ?ǎ-phyε? khàn yâ dè.
 1SG car NMLZ-break receive yâ REAL
 「私は車を破壊された」

以上をまとめると次表のようになる。

表3 所有者がものである所有者受動文の容認度

	－ 重要	＋ 重要
－ 状態変化	低 (137)	低 (139)
＋ 状態変化	低 (138)	高 (140)

以上に例示したとおり、所有物がものである所有者受動文は、所有物が所有者にとって重要なものであり、かつ、それが状態変化を被る場合に成立しやすいようである。この理由は、おそらく、強い被害の意味の感じ取りやすさによるものと思われる。重要なものに行為を受ける場合のほうが、重要ではないものに行為を受ける場合よりも被害の意味を感じ取りやすく、また、所有物が状態変化を被る方が、所有物が状態変化を被らないよりも被害の意味を感じ取りやすいと考えられる。このように、被害の意味が強い場合にこの種の所有者受動文が成立しやすいものと考えられる。

以上、所有物がものである所有者受動文が成立する条件として、2つの条件が組み合わさった場合を想定したが、多くの例にこのことが当てはまるかどうかに関しては、まだ疑問の余地がある。というのも、所有物がものである所有者受動文の容認性判断は、話者によってゆれが観

察されるうえに、同一話者であっても、同一の文に対して毎回同じ判断を与えるわけでもないためである。このように容認度に差が出るのは、所有物にもものを持つこの種の所有者受動文の使用頻度が低いことに起因すると思われる。また、話者がどのような文脈を想定するかによっても判断にゆれが出るものと思われる。

ところで、上述したとおり、所有物にもものを取る所有者受動文には、容認度の低い例もあるのだが、そのような例であっても、以下のように所有物の所有者を明確にして表現すれば、容認度が増すことが多い。この事実は以下のコントラストに現れる(なお、このようにして表現される場合、この文の主語は通常、省略される。これは所有者を二度いうことが冗長であるためであると思われる)。

(141) ?ɲà ?ei? ?ǎ-kàN khàN yâ dè.

1SG bag NMLZ-kick receive yâ REAL

「私は鞆を蹴られた」

(142) (ɲà) ɲà ?ei? ?ǎ-kàN khàN yâ dè.

1SG 1SG.GEN bag NMLZ-kick receive yâ REAL

「(私は) 私の鞆を蹴られた」

(143) ?ɲà sà?ou? ?ǎ-nín khàN yâ dè.

1SG book NMLZ-tread receive yâ REAL

「私は本を踏まれた」

(144) (ɲà) ɲà sà?ou? ?ǎ-nín khàN yâ dè.

1SG 1SG.GEN book NMLZ-tread receive yâ REAL

「(私は) 私の本を踏まれた」

このように、所有者を明示すると容認度が上がる人が多いのであるが、その理由は、所有者を明示することによって、それだけ直接的な被害の意味が感じ取りやすくなるためであると思われる。先述のとおり、所有物が身体部位である所有者受動文は成立しやすいが、この例も身体部位に直接的に影響を被るために直接的な被害の意味が感じ取りやすく、所有者受動文が成立しやすいのかもしれない。ただし、現時点においては、被害の直接性の重要性を示す証拠は乏しいため、この点に関する考えは憶測の域を出ない。

以上いくつかの観点から所有物がものである所有者受動文の成立条件に関して考察してきたが、この種の文の成立条件は非常に複雑であり、現時点ではこの種の文の成立条件に関する問題を完全に解決することができない。この点に関しては今後の研究によるさらなる言語事実の積み上げが必要である。

ところで、日本語の所有者受動文における所有物は、「私は娘を殺された」という文のように、有生物(有情者)であることも可能である。一方、ビルマ語の場合、所有物に人間を取る例は全く容認されない。以下の例に示すとおりである。

(145)**ŋà θămí ?ă-θa? khàn yâ dè.*

1SG daughter NMLZ-kill receive yâ REAL

「私は娘を殺された」

なお、本節で見てきたビルマ語の所有者受動文は、すべて「被害」の意味を表す受動構文であった。4.2節で示したとおり、この構文が「利益・恩恵」の意味を表す場合がある。以下に例を示すとおり、このような意味を表す受動構文でも所有者受動文を形成することは可能である。このような文の成立条件は、上述の説明では説明することができない。この種の文の成立条件については今後、検討する必要がある。

(146) *θù ?ăhlá gò chímwán khàn yâ dè.*

3SG beauty ACC praise receive yâ REAL

「(彼女は)彼女の美しさをほめられた」(Okell and Allott 2001:29)

(147) *dì sháunbá gò me?gázín dé hmà ?ă-phòpyâ khàn yâ dè.*

this prose ACC magazine inside LOC NMLZ-state receive yâ REAL

「(私は)この散文を雑誌に載せられた」

最後に、所有受動構文における動作主の標示方法に関して若干述べておく。以下の例に示すとおり、一般的に、この種の文で動作主を標示すると、不自然であると判断され、容認度が低い。

(148) *?ŋà θù yê lɛ? ?ă-phyá? khàn yâ dè.*

1SG 3SG GEN hand NMLZ-cut receive yâ REAL

「私は彼に手を切られた」

(149) *?ŋà lɛ? θù yê ?ă-phyá? khàn yâ dè.*

1SG hand 3SG GEN NMLZ-cut receive yâ REAL

「私は彼に手を切られた」

岡野 (2009:129) においてもこの種の文の容認度がかなり低いことが指摘されており、その理由として、(148) の *θù yê lɛ? ?ă-phyá?* の部分に関して、*θù yê ?ă-phyá?* 「彼の切ること」ではなく、*θù yê lɛ?* 「彼の手」の解釈の方が優先されるためであるかもしれないと述べられている。

以上のように、一般的には、所有者受動文に動作主が現れると不自然な文となるのであるが、次の文のように動作主名詞句が主格で現れる例では、動作主が現れることがある。以下のような例は自然であると判断される。

(150) *ŋà chídau? khwé ?ă-kai? khàn yâ dè.*

1SG leg dog NMLZ-bite receive yâ REAL

「私は足を犬に噛まれた」

- (151) ɲà ʔeiʔ θǎkhó ʔǎ-khó khàn yâ dè.
 1SG bag thief NMLZ-steal receive yâ REAL
 「私は鞆を泥棒に盗まれた」

(148) に示すとおり、動作主を明示することができない所有者受動文があるが、動作主も含めて同様の意味を表現したい場合は、そもそも受動構文を用いない。例えば、(148) の文のかわりに、次のような文を用いて同種の意味が表現される。

- (152) θù ɲâ lɛʔ kò phyaʔ tɛ.
 3SG 1SG.GEN hand ACC cut REAL
 「彼が私の手を切った」

5.5 熟語の名詞要素

本節では、ʔǎ-V 名詞の直前に、熟語を構成する名詞要素が現れる例を見る。以下の例では、ʔǎ-V 名詞の直前に seiʔ 「心」という名詞句が現れている。この名詞句は、動作主でも、三項動詞の対象でも、主語の所有物でもない。

- (153) ɲà seiʔ ʔǎ-shó khàn yâ dè.
 1SG mind NMLZ-be.bad receive yâ REAL
 「私は怒られた」

この文に意味的に対応する能動文は以下の文である。

- (154) θù ɲâ gò seiʔ shó dè.
 3SG 1SG ACC mind be.bad REAL
 「彼は私を怒った」

(154) では、seiʔ 「心」と shó 「悪い」が熟語を成しており、この文に意味的に対応する受動構文である (153) においては、この熟語の seiʔ 「心」が ʔǎ-V 名詞の直前に現れているものと考えられる。

なお、この seiʔ 「心」と shó 「悪い」の組み合わせを N+V 型の複合動詞と考えることはできない。なぜならば、以下の例に示すとおり、seiʔ 「心」と shó 「悪い」は tàun 「さえ」のような「語」に近い統語的要素をその内部に含むことができるためである。複合動詞は一般的にその内部に統語的要素を含むことができないため、seiʔ 「心」と shó 「悪い」を N+V 型複合動詞と見なすことはできない。

- (155) θù seiʔ tàun shó dè.
 3SG mind even be.bad REAL
 「彼は怒りさえした」

この事実を考慮し、本稿では、(153)のような例は、sei? 「心」と shó 「悪い」というふたつの語からなる熟語的表現が ʔă-V 名詞の V となる時、名詞要素が ʔă-V 名詞の直前に現れる例であると考えられる。

以上見たような例においても、名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。以下の例に示すとおりである。

(156) ɲà sei? shó khàn yâ dè.

1SG mind be.bad receive yâ REAL

「私は怒られた」

同様の例は他にもある。以下の例では、ʔă-V 名詞の直前に dó 「怒り」という名詞句が出現しているが、この例も前節までで見た分類に収まりきらない。ʔă-V 名詞の直前に現れる dó 「怒り」は dó 「怒り」と pwâ 「膨らむ」から成る熟語の名詞要素が現れているものと考えられる。

(157) ɲà dó ʔă-pwâ khàn yâ dè.

1SG anger NMLZ-swell receive yâ REAL

「私は怒られた」

次の例では、ʔă-V 名詞の直前に ʔăthìn 「考え」という名詞句が出現しているが、この例も前節までで見た分類に収まりきらない。この例は ʔăthìn 「考え」と θé 「小さい」から成る熟語の名詞要素が ʔă-V 名詞の直前に現れているものと考えられる。

(158) ɲà ʔăthìn ʔă-θé khàn yâ dè.

1SG thinking NMLZ-be.small receive yâ REAL

「私は見下された」

これらのように、ʔă-V 名詞の直前に熟語を構成する名詞要素が現れる例でも、名詞化接頭辞 ʔă- は脱落しうる。以下の例に示すとおりである。

(159) ɲà dó pwâ khàn yâ dè.

1SG anger swell receive yâ REAL

「私は怒られた」

(160) ɲà ʔăthìn θé khàn yâ dè.

1SG thinking be.small receive yâ REAL

「私は見下された」

5.6 道具を表す名詞句

岡野 (2009:136) では、ʔă-V 名詞の直前に道具の意味役割を持つ名詞句が現れる以下のような例が観察されることが指摘されている。

- (161) kòsò hà gé ʔǎ-pyiʔ khàn yâ dè.
 PSN TOP stone NMLZ-throw receive yâ REAL
 「コーソーは石を投げられた」(岡野 2009:137 一部改変)

この文に意味的に対応する能動文は以下のとおりである。

- (162) ʈù kòsò gò gé nê/*ø pyiʔ tè.
 3SG PSN TOP stone COM/ø throw REAL
 「彼はコーソーに石を投げた」(岡野 2009:137 一部改変)

対応する能動文においては道具は必ず共格で標示されなければならないが、意味的に対応する受動構文の場合では、道具は主格で現れうる(共格で標示されてもよい)。

この種の ʔǎ-V 名詞の直前に道具が現れる例においても ʔǎ-V 名詞の名詞化接頭辞 ʔǎ- は脱落しうる。以下の例を参照されたい。

- (163) kòsò hà gé **pyiʔ** khàn yâ dè.
 PSN TOP stone throw receive yâ REAL
 「コーソーは投石を受けた」(岡野 2009:137 一部改変)

類例として以下のような例を挙げることができる。

- (164) ɲà dá ʔǎ-thó khàn yâ dè.
 1SG knife NMLZ-stab receive yâ REAL
 「私は刃物で刺された」

- (165) ɲà ʈǎnaʔ ʔǎ-pyiʔ khàn yâ dè.
 1SG gun NMLZ-hit receive yâ REAL
 「私は銃で撃たれた」

- (166) ɲà dǎgá ʔǎ-hpaʔ khàn yâ dè.
 1SG door NMLZ-interleave receive yâ REAL
 「私はドアに挟まれた」

これらの例でも接頭辞 ʔǎ- の脱落が起こりうる。以下に例示するとおりである。

- (167) ɲà dá **thó** khàn yâ dè.
 1SG knife stab receive yâ REAL
 「私は刃物で刺された」

- (168) ɲà ʈǎnaʔ **pyiʔ** khàn yâ dè.
 1SG gun hit receive yâ REAL
 「私は銃で撃たれた」

- (169) *ŋà dǎgá hpa? khàn yâ dè.*
 1SG door interleave receive yâ REAL
 「私はドアに挟まれた」

5.7 起点を表す名詞句

以下の例では、*?ǎ-V* 名詞の直前に起点の意味役割を持つ名詞句が現れている。

- (170) *ŋà cáun ?ǎ-thou? khàn yâ dè.*
 1SG school NMLZ-take.out receive yâ REAL
 「私は学校から追い出された」

この文と意味的に対応する能動文は以下とおりである。

- (171) *θù ŋá gò cáun gâné/ø thou? tè.*
 3SG 1SG ACC school ABL/ø take.out REAL
 「彼は私を学校から追い出した」

対応する能動文においては、起点は奪格または主格で現れている。(170)では、この主格の起点が *?ǎ-V* 名詞の直前に現れているものと考えられる(起点は奪格で標示されてもよい)。

この種の *?ǎ-V* 名詞の直前に起点が現れる例においても *?ǎ-V* 名詞の名詞化接頭辞 *?ǎ-* は脱落しうる。以下の例に示すとおりである。

- (172) *ŋà cáun thou? khàn yâ dè.*
 1SG school take.out receive yâ REAL
 「私は学校から追い出された」

類例としては、以下の例がある。

- (173) *ŋà ?ǎlou? ?ǎ-phyou? khàn yâ dè.*
 1SG job NMLZ-take.off receive yâ REAL
 「私は解雇された」

- (174) *ŋà ?ǎlou? phyou? khàn yâ dè.*
 1SG job take.off receive yâ REAL
 「私は解雇された」

5.8 *?ǎ-* が脱落した *?ǎ-V* 名詞は直前の名詞と複合語を成すか

本節では、*?ǎ-V* 名詞の直前に名詞要素が現れる受動構文において、接頭辞 *?ǎ-* が脱落した場合、*?ǎ-V* 名詞とそれに先行する名詞要素とが複合語を成すかどうかを検討する。先行研究について述べると、Okell and Allott (2001) は、この状況を *?ǎ-V* 名詞と先行する名詞が緊密に結び

つく (closely linked) と表現しているが、この表現は曖昧である。岡野 (2009:130) では、ʔă-V 名詞の直前に所有物が現れる所有者受動文について、「名詞化接頭辞 ʔă- が脱落して、前にある名詞と複合を起こす」と述べられている。

ʔă-の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素は次の点で複合語の特徴を持つ。ビルマ語において、接頭辞 ʔă- の脱落は複合時にも起こる。Okell (1969:47–8) は、ビルマ語において、ʔă という音節が複合時に脱落する例を示している。この ʔă という音節には名詞化接頭辞 ʔă- も含まれる。以下に Okell (1969:47–8) から例を示す。

- pányàun 「ピンク色」 ← pán 「花」 + ʔâyàun 「色」
- bāmàgâ 「ビルマ人の踊り」 ← bāmà 「ビルマ人」 + ʔă-kâ 「踊り (NMLZ-踊る)」
- ʔèinθiʔ 「新宅」 ← ʔèin 「家」 + ʔă-θiʔ 「新 (NMLZ-新しい)」

一方、ʔă-の脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞要素は次の点で複合語の特徴を持たない。ビルマ語の複合において、複合時に起こるもうひとつの現象として voicing sandhi を挙げることができる (Okell 1969:12–8、藪 1970:4、Nishi 1998)。これは前部要素が開音節もしくは鼻音末子音 N を持ち、かつ、後部要素の頭子音が対応する有声音を持つとき、後部要素の頭子音が有声音と交替する現象である。より具体的には、以下のようなパターンが観察される。

- p → b (e.g., pâyá 「パゴダ」 + pwé 「祭り」 → pâyábwé 「パゴダ祭り」)
- ph → b (e.g., sāláun 「土鍋の蓋」 + phóun 「覆う」 → sāláunbóun 「土鍋の蓋」)
- θ → ð (e.g., ʔámé 「獲物」 + θá 「肉」 → ʔáméðá 「牛肉」)
- t → d (e.g., sà 「手紙」 + taiʔ 「ビル」 → sàdaiʔ 「郵便局」)
- th → d (e.g., yè 「水」 + thwεʔ 「出る」 → yèdwεʔ 「泉」)
- c → j (e.g., lù 「人」 + cí 「大きい」 → lùjí 「大人」)
- ch → j (e.g., yè 「水」 + chán 「冷たい」 → yèján 「冷水」)
- k → g (e.g., kăyìn 「カレン人」 + ʔăkâ 「踊り」 → kăyìngâ 「カレン人の踊り」)
- kh → g (e.g., khăyí 「旅行」 + khâ 「料金」 → khăyígâ 「旅費」)
- s → z (e.g., chì 「足」 + suʔ 「はめる」 → chìzuʔ 「靴下」)
- sh → z (e.g., ʔóun 「ココヤシ」 + shi 「油」 → ʔóunzi 「椰子油」)

この交替は、名詞化接頭辞 ʔă- の脱落した ʔă-V 名詞とその直前に現れる名詞の間では起こらない。例えば、thó 「挿す、刺す」という動詞は複合時に有声化を起こす (e.g., yìn 「胸」 + thó → yìndó 「ブローチ」、shàn 「髪」 + thó → zădó 「かんざし」、zăbwé 「机」 + thó → zăbwédó 「ウェイター」)。一方、ʔă- が脱落した ʔă-V 名詞とそれに先行する名詞では、同一の形態素であるにも関わらず、thó 「挿す、刺す」は交替を起こさない。以下の例に示すとおりである。

(175) ɲà yìn ʔă-thó khàn yâ dè.

1SG chest NMLZ-pierce receive yâ REAL

「私は胸を刺された」

(176) *ŋà yìn thó khàn yâ dè.*
 1SG chest pierce receive yâ REAL
 「私は胸を刺された」

(177)**ŋà yìn dó khàn yâ dè.*
 1SG chest pierce receive yâ REAL
 「私は胸を刺された」

(178) *ŋà dá ?ă-thó khàn yâ dè.*
 1SG knife NMLZ-stab receive yâ REAL
 「私は刃物で刺された」

(179) *ŋà dá thó khàn yâ dè.*
 1SG knife stab receive yâ REAL
 「私は刃物で刺された」

(180)**ŋà dá dó khàn yâ dè.*
 1SG knife pierce receive yâ REAL
 「私は刃物で刺された」

同様に、*pô* 「送る」という動詞は複合時には有声化する (e.g., *sà* 「手紙」 + *pô* → *sàbô* 「郵便車」)。しかし、*?ă-* の脱落した *?ă-V* 名詞とそれに先行する名詞では、*pô* 「送る」は交替を起こさない。以下の例に示すとおりである。

(181) *ŋà myi?tà ?ă-pô khàn yâ dè.*
 1SG love NMLZ-send receive yâ REAL
 「私は祈りを捧げられた」

(182) *ŋà myi?tà pô khàn yâ dè.*
 1SG love send receive yâ REAL
 「私は祈りを捧げられた」

(183)**ŋà myi?tà bô khàn yâ dè.*
 1SG love send receive yâ REAL
 「私は祈りを捧げられた」

以上のように、接頭辞 *?ă-* の脱落した *?ă-V* 名詞とそれに先行する名詞要素の関係は両義的である。すなわち、接頭辞 *?ă-* が脱落するという点では複合語と類似するが、後部要素が有声化を起こさないという点では複合語と相違する。これらの事実から、本稿では、接頭辞 *?ă-* の脱落した *?ă-V* 名詞とそれに先行する名詞要素とは完全には複合を成していないものと考えたい。ただし、この問題の解決にはさらなる言語事実の発掘が必要であり、現時点ではこの問題を完全に解決することができない。

6 受動構文の諸特徴

本節では、受動構文の諸特徴について述べる。具体的には、主語の有生性、主語の意志性、受動構文の使用頻度、自動詞の ?ă-V 名詞を持つ受動構文に関して考察する。

6.1 主語の有生性

Sawada (1995:176 note 14) において指摘されているとおり、ビルマ語受動構文の主語は人間名詞句に限られる。例えば、以下の例のように、受動構文の主語位置にものが置かれる例は容認されない。

(184)*dì zəbwé ?ă-yai? khàn yâ dè.

this desk NMLZ-beat receive yâ REAL

「この机が叩かれた」(Sawada 1995:176 note 14)

次の例は一見、上例と同様の形式を取るが容認可能であると判断される。しかしながら、この例では主語にモノが置かれているのではなく、この文の主語は hmàn 「ガラス」ではなく、ガラスの所有者である。この文は、主語は明示されていないが、5.4 節で見た所有者受動文に相当する。

(185) hmàn ?ă-khwé khàn yâ dè.

glass NMLZ-break receive yâ REAL

「(誰かが) ガラスを割られた」

受動構文の主語に基本的に人間名詞句が置かれるという上記の特徴は、この構文における述語動詞 khàn 「受ける」の選択特性に起因すると考えられる。すなわち、動詞 khàn 「受ける」が人間名詞句を主語に取る動詞であるため、受動構文においても人間名詞句が主語として現れると考えることができる。

以上述べたように、受動構文の主語には基本的には人間名詞句のみが立つが、次の例のように、表面上は無生物が来るという例もなくはない。このような例の主語は、国や地域、組織などの広い意味での人間に相当する名詞に限られる。

(186) myànmànàinṅàn nèchè khàn yâ dè.

Burma invade receive yâ REAL

「ミャンマー国は侵略された」

(187) zégwə? thé hmà ?ămyázóun ?ătù pyûlou? khàn yâ dè

market inside LOC most imitation do receive yâ REAL.ATTR

dăzei? twè gâ tòçibà shònì fili? dô bà.

brand PL NOM Toshiba Sony Philips PL POLITE

「市場の中でもっとも偽造された商標は、東芝、ソニー、フィリップスです」(MT)

6.2 主語の意志性

受動構文における主語の意志性は「不可避」を表す助動詞 *yâ* の有無によって表される。受動構文において、助動詞 *yâ* が置かれない場合、その文の意味は「自ら進んで…される」という、意志性を表す意味になる。一方、これまで見てきたような、助動詞 *yâ* を含む受動構文の場合は、自らの意志に関わらず動作行為を受けるという意味になる。以下の (188) は水掛け祭りなどにおいて、自ら進んで水をかけられる場合に用いられる。一方、(189) は望まないにも関わらず、水をかけられ被害を被ったという場合に用いられる。

(188) *ŋà yè pɛʔ khàn dè.*
 1SG water break receive REAL
 「私は(自ら進んで)水をかけられた」

(189) *ŋà yè pɛʔ khàn yâ dè.*
 1SG water break receive *yâ* REAL
 「私(好まないのに)水をかけられた」

Okell and Allott (2001:29) は以下のミニマルペアを提示している。

(190) *θù ʔă-phán khàn dè.*
 3SG NMLZ-arrest receive REAL
 「彼は自首した」

(191) *θù ʔă-phán khàn yâ dè.*
 3SG NMLZ-arrest receive *yâ* REAL
 「彼は逮捕された」

(192) *θù ʔă-ywé khàn dè.*
 3SG NMLZ-elect receive REAL
 「彼は立候補した」

(193) *θù ʔă-ywé khàn yâ dè.*
 3SG NMLZ-elect receive *yâ* REAL
 「彼は選出された」

6.3 受動構文の使用頻度

東南アジア大陸部の言語には受動構文を持たない言語が見られ、また、受動構文を有する言語であっても受動構文の使用頻度が低いことが知られている。ビルマ語でも同様であり、特に自然談話においては被害の意味を表す場合であっても受動構文が用いられないことが多いとされる(岡野 2007:130)。ビルマ語の自然談話では、次の (194) のような受動構文を用いるよりも、

(195) のような意味的に対応する能動文を用いる方が多い。このようにビルマ語受動構文の使用頻度が低い理由のひとつは、この構文が特に重要な機能を担わないことにあると思われる (7 節を参照)。

(194) *ŋà khwé ?ă-kai? khàn yâ dè.*
 1SG dog NMLZ-bite receive yâ REAL
 「私は犬に噛まれた」

(195) *khwé ŋà gò kai? tè.*
 dog 1SG ACC bite REAL
 「犬が私を噛んだ」

6.4 自動詞の ?ă-V 名詞

本節では、自動詞の ?ă-V 名詞を持つ受動構文について述べる。受動構文の ?ă-V 名詞になりうる動詞はその大部分が他動詞であり、(197) のような自動詞の ?ă-V 名詞を持つ受動構文は通常、容認されない。

(196) *ŋà yú dè.*
 1SG be.mad REAL
 「私は馬鹿だ」

(197)**ŋà ?ă-yú khàn yâ dè.*
 1SG NMLZ-be.mad receive yâ REAL
 「私は馬鹿にされた」

ところが、少数の例では自動詞が ?ă-V 名詞に来ることがある。自動詞の ?ă-V 名詞を持つ受動構文の存在は Sawada (1995:176 note 14) でも指摘されている。以下の例は Sawada (1995:176 note 14) からの引用である。

(198) *θù ?ă-ŋa? khàn yâ dè.*
 3SG NMLZ-be.hungry receive yâ REAL
 ‘He suffered from hunger.’

筆者は大野 (1983) に掲載される全動詞を対象として受動構文を形成しうるか否かを調べたが、この調査により次のような自動詞が受動構文を形成しうることが判明した: *ŋa?* 「飢える」 *shà* 「飢える」 *shínyé* 「貧しい、悲惨だ、苦しい」 *hɲò* 「焦げ臭い」 *ni?nà* 「苦しむ」 *tínca?* 「厳しい」 *ɲoun* 「損する」 *ɲân* 「劣っている」 *ɲi?* 「汚い」 *θè* 「死ぬ」。受動構文を形成する自動詞は存在するにしても、極めてまれであるといえる。以下のような例が観察される。

(199) nə ʔă-shínyé khàn yá dè.
 1SG NMLZ-be.poor receive yá REAL
 「私は貧しさに苦しんだ」

(200) siʔpwé hmà siʔθá dwè ʔă-θè khàn laiʔ yá dè.
 war LOC soldier PL NMLZ-die receive EMPH yá REAL
 「戦争で兵士たちが死なされた」⁶

7 受動構文の機能

本節では、類型論的観点からビルマ語の受動構文の機能に関して考察し、より大きな観点から、ビルマ語の受動構文を位置付ける。

類型論的に見て、受動構文には以下のような機能が認められることが知られている。

- 動作主を背景化する機能
- 被動者を前景化する機能
- 従属節と主節の主語を統一する機能

以下、本節では、これらの機能がビルマ語受動構文にも認められるかどうかを検討し、結論として、ビルマ語受動構文がこれらのどの機能も担わないことを指摘する。

7.1 動作主を背景化する機能

Shibatani (1985:833) は動作主の背景化 (defocusing of the agent) が受動構文の最も主要な機能であると指摘している。その根拠として、Shibatani (1985) は 1) 一般的に受動構文では動作主が明示的に表されないこと ; 2) いくつかの言語 (フィンランド語など) で受動構文における動作主が存在が避けられること ; 3) 一般的に受動化が動作主を持たない自動詞節に適用されないことを挙げている。

3.1 節で述べたように、ビルマ語受動構文においても動作主は明示されないことが多い。また、ʔă-V 名詞の前に、三項動詞の対象 (5.3 節)、主語の所有物 (5.4 節)、熟語表現の名詞要素 (5.5 節) などが生起するような例では、動作主を明示することができない場合が多い。これらの点では、受動構文は動作主を背景化しているといえる。

しかしながら、動作主の背景化はこの構文の本質的な機能であるとはいいがたい。例えば、日本語の「北京でオリンピックが開催された」や「ビルマではビルマ語が話されている」のような文では動作主が不特定であり、これを明示させないために受動構文を用いて動作主を背景化していると考えられる。しかしながら、このような文はビルマ語では以下のように表現され、受動構文を用いると非文となる。以下の例に示すとおりである。

⁶ 戦争で一番最初に殺されるために戦う兵を ʔă-θè+khàn+ǎ́ (NMLZ-die+receive+man) というが、この複合語中にも自動詞の ʔă-V 名詞を持つ受動構文が含まれる。

(201) pìkín hmà ?òlànpì?pwédò gò cín-pà dè.

Beijing LOC Olympics ACC hold REAL

「北京でオリンピックを開催した」(直訳)

(202)*pìkín hmà ?òlànpì?pwédò ?ă-cín-pà khàn yâ dè.

Beijing LOC Olympics NMLZ-hold receive yâ REAL

「北京でオリンピックが開催された」

(203) bāmàpyì hmà bāmàzǎgá gò pyó dè.

Burma LOC Burmese ACC speak REAL

「ビルマではビルマ語を話す」(直訳)

(204)*bāmàpyì hmà bāmàzǎgá ?ă-pyó khàn yâ dè.

Burma LOC Burmese NMLZ-speak receive yâ REAL

「ビルマではビルマ語が話されている」

これらの例が示すことは、ビルマ語においては、動作主をそのまま省略することが動作主を背景化するための主要な手段であるということである。ビルマ語の受動構文は主語が人間名詞句でなければならないなどの制約があり、また、この構文は利害の意味を帯びるがために、上記の例を受動構文を用いて表現すると非文となる。ビルマ語の受動構文は動作主を背景化するために用いられているとは言いがたい。

同様に、小説 *The Catcher in the Rye* に見られる ‘only seniors were allowed to bring girls with them’ という英文は動作主が不特定であり、これを明示しないために受動構文を用いて動作主が背景化されているのであると考えられる。一方、この文の翻訳であるビルマ語文は以下の文であるが、受動構文は用いられておらず、やはり動作主をそのまま省略することにより、動作主が背景化されている。

(205) tánjícáunǎjǐ dwè gò θà méinmâgǎlé dwè gò khògwîn pyû dè.

senior PL ACC only girl PL ACC permission.to.call do REAL

「高学年にだけ女の子を呼ぶ許可を与えた」(lèwînǎù)

以上の考察から、ビルマ語の受動構文は動作主を背景化する機能を担ってはならず、ビルマ語において動作主を背景化する主要な手段は、動作主をそのまま省略する方法であると考えたい。

7.2 被動者を前景化する機能

受動構文の主要な機能として、被動者を前景化する機能があるとされる (Keenan and Dryer 2007)。受動構文を用いて被動者が前景化されるのは、被動者の有生性が動作主の有生性よりも高いなどの場合である (Dixon 1994:148)。

以下の例のとおり、ビルマ語の場合も被動者は主語位置に置かれており、被動者は前景化されているといえる。

(206) ṅà θù yê ʔă-yaiʔ khàn yâ dè.

1SG 3SG GEN NMLZ-beat receive yâ REAL

「私は彼に殴られた」

このように、確かにビルマ語受動構文では被動者が前景化されているといえるのであるが、この構文には主語が人間名詞句でなければならないという制約があり、使用することのできる範囲が限定的である。また、この構文は利害という特殊な意味を帯びているため、命題的意味を変えない統語操作というわけではない。「私は彼に呼ばれた」という日本語文は、被動者(受け手)を前景化するために用いられていると考えられるが、この文をビルマ語受動構文を用いて表現すると被害の意味を伴うことになる。

ビルマ語では受動構文ではなく、次の文のように、強調したい要素を文頭に持って来るといふ語順の変更が、被動者を前景化するための主要な方法であるとされている。岡野(2007)によると、受動構文を用いずとも、ビルマ語では(207)のような文がすでに受け身的(受動的)な意味を帯びているとされる。Okell and Allott (2001:8)も直接目的語が文頭に置かれるビルマ語文はしばしば英語の受動構文により翻訳することができると指摘している。Wheatley (1987)は目的語が主語よりも前に現れる文に英語の受動態の訳を与えている(岡野 2009:127 注 7)。

(207) ṅâ gò θù yaiʔ tè.

1SG ACC 3SG beat REAL

「私を彼が殴った」

以上の考察から、被動者の前景化はビルマ語受動構文の本質的な機能ではないと考えられる。

7.3 従属節と主節の主語を統一する機能

Dixon (1994) は受動と逆受動の機能のひとつとして、節連結において、*pivot constraint* を満たす機能があると指摘している。Dixon (1994:148) は以下のように説明を加えている([]内は筆者による)。

one major function [of passive or antipassive] is often to feed a pivot constraint on clause combining – this can be a function of passive in a language with accusative syntax (S/A pivot) and of antipassive in one with ergative syntax (S/O pivot).

この機能は *pivot* を有する言語に観察されるものであるが、ビルマ語は *pivotless language* であり、基本的に節連結において *pivot constraint* を満たす必要がない。以下の例では、主節の主語が省略されているが、この主語は無文脈の状況では、「母」にも「父」にも解釈しうる。

(208) ʔămè ʔăphê gò cí bí pyàn dè.

mother father ACC see SEQ return REAL

「母が父を見て、(母が/父が) 帰った」

以下に示す実例は、ビルマ語においては文脈から推測できるのであれば、従属節と主節の主語が不統一であっても問題がないことを示している。

(209) θóunbéinkáθā́má dwè gò paiʔshàn táun yìn tǎwεʔ pé pé dè.

cyclo.driver PL ACC money request if half only give HS

「輪タクの運転手に、(運転手が) 料金を請求したら、半額だけ払えと言われた」(直訳)

「料金を請求されたら、輪タクの運転手に半額だけ払えって」(ʔāpàđá)

(210) cǎnô ʔá (中略) táunbàn θǎphyîn θù hñîn tǎkhándé

1SG ACC ask because 3SG COM inside.one.room

ʔǎtù nè yá dō đê bǎwâ đô yauʔ θwá gē bà òi.

together live yá INCHO REAL.ATTR life ALL arrive go PAST POLITE REAL

「(彼が) 私に頼んだので(私は) 彼と同じ部屋と一緒に住む生活になりました」(直訳)

「(彼に) 私は頼まれたので彼と同じ部屋と一緒に住むようになりました」(yòçihàdà)

ビルマ語受動構文には主語の有生性の制約があり、また、この構文は利害という特別な意味を帯びているがために、命題的意味を変えない統語的操作としてこの構文を用いることはできない。ビルマ語の受動構文は従属節と主節の主語を統一する機能を担っているとは言い難い。

8 おわりに

本稿では、これまで先行研究において考察されることの少なかったビルマ語受動構文を対象に考察を行った。具体的には、以下のような点を中心に論じた。

2 節では、受動構文に言及のある先行研究を概観し、Okell (1969)、Wheatley (1982)、Sawada (1995)、Okell and Allott (2001)、岡野 (2007, 2009) などの文献に、この構文に関する言及が見られることを述べた。

3 節では、本稿で扱う受動構文を名詞化接頭辞 ʔǎ- による ʔǎ-V 名詞を持つ受動構文に限定した。また、この構文における主語は、意味的に対応する能動文と比較した場合、i) 意味的に対応する能動文の目的語、ii) 意味的に対応する能動文の目的語の所有者、iii) 意味的に対応する文の主語の三種があることを述べ、この構文に現れる ʔǎ-V 名詞が統語的には述語動詞 khàn 「受ける」の目的語であることを指摘した。

4 節では、この受動構文を形成しうる動詞に関して述べ、この構文には「被害」を表すものと「利益・恩恵」を表すものがあることを示した。

5 節では、受動構文に現れる名詞化接頭辞 ʔǎ- の脱落条件に関して考察を行い、この接頭辞の脱落条件を、1) ʔǎ-V 名詞を形成する動詞が二音節以上の場合、2) ʔǎ-V 名詞の直前に主格の名詞(句)が現れる場合、と規定した。また、2) の条件に該当する名詞(句)には、i) 主格で現れる動作主(5.2 節)、ii) 三項動詞の対象や着点(5.3 節)、iii) 主語の所有物(5.4 節)、iv) 熟語を構成する名詞要素(5.5 節)、v) 道具を表す名詞(句)(5.6 節)、vi) 起点を表す名詞(句)(5.7 節)があることを示した。

6 節では、この構文における主語の有生性、主語の意志性、この構文の使用頻度、自動詞の

?ă-V 名詞を持つ受動構文に関して述べ、この構文の主語には人間名詞句のみが生起すること、主語の意志性は助動詞 yâ の有無によって表されること、この構文の自然談話における使用頻度が低いこと、受動構文を形成しうる自動詞には θè「死ぬ」、ŋa?「飢える」、shínyé「貧しい、悲惨だ、苦しい」などがあることを述べた。

7 節では、類型論的観点からビルマ語受動構文の機能を考察し、ビルマ語受動構文が類型論的に受動構文を特徴付ける、動作主を背景化する機能、被動者を前景化する機能、従属節と主節の主語を統一する機能のどの機能も担わないことを示した。

なお、先行研究では詳細に述べられることがなかった点として、次のことを明らかにした。

1. 受動構文が「利益・恩恵」の意味を表す場合があるということは、先行研究でも指摘されることがあった。しかし、このような文については、二三の例を挙げるに留められていた。本稿では、大量のデータを調査し、具体的にどのような動詞が ?ă-V 名詞になった場合に「利益・恩恵」の意味を表す受動構文が成立するかを示した (4.2 節)。
2. 受動構文における名詞化接頭辞 ?ă- の脱落条件について、すでに Okell and Allott (2001) に記述が見られるが、Okell and Allott (2001) に示された [II] の条件は若干の例を挙げるに留められ、この条件はいくつかの点において不十分であった。本稿では、この点をより詳しく考察し、?ă-V 名詞の直前に主格で現れる名詞(句)が生起する場合に名詞化接頭辞 ?ă- が脱落すると規定し、この種の名詞(句)には様々なものがあることを明らかにした (5 節)。
3. 先行研究では、受動構文における動作主の標示に関して、いくつかの標示法があることは知られていたが、それらの使い分けに関して触れたものはなかった。本稿ではこの点に関して考察し、この使い分けには動作主の有生性および指示性が関与的であるという考えを示した (5.2 節)。
4. 先行研究では、ビルマ語に所有者受動文が存在することが述べられることがあったが、例を挙げるに留められていた。本稿では、この種の文を対象に詳述し、この種の文の成立条件についても考察を行った (5.4 節)。
5. ビルマ語の所有者受動文において容認度が低い文であっても、その所有者を属格によって標示すると、容認度が増すという事実は、これまで先行研究で指摘されてこなかったことである (5.4 節)。
6. 名詞化接頭辞 ?ă- の脱落した ?ă-V 名詞とそれに先行する名詞の関係に関して、先行研究では複合とする場合や「緊密に結びつく」という曖昧な表現で説明される場合があった。本稿ではこの問題をいくつかの根拠に基づき考察し、これらが完全には複合を成していないという考えを示した (5.8 節)。
7. 先行研究ではビルマ語受動構文の機能的側面に関して考察されることがなかったが、本稿では類型論的観点からビルマ語受動構文の機能を考察し、ビルマ語受動構文が類型論的に見られる受動構文の典型的な機能を欠くことを指摘した (7 節)。

また、本稿の考察を通じて以下のような未解決の問題の存在が明らかになった。これらの問

題に対しては現時点で完全な解答を与えることができない。今後の研究により解決されるべき課題である。

- 所有物がものである所有者受動文はどのような条件下で成立するか (5.4 節)
- 利益・恩恵を表す所有者受動文はどのような条件下で成立するか (5.4 節)
- 名詞化接頭辞 ?ă- の脱落した ?ă-V 名詞とそれに先行する名詞要素は形態統語的にどのような関係を持つか (5.8 節)

記号・略号一覧

-接辞境界; 1 一人称; 2 二人称; 3 三人称; ABL 奪格 ACC 対格; ALL 向格; ATTR 名詞修飾形; COM 共格; DAT 与格; EMPH 強調; GEN 属格; INCHO 起動; INST 具格; IRR 非現実; LOC 位格; NMLZ 名詞化; NOM 主格; PASS 受動; PERF 完了; PLN 地名; PL 複数; PSN 人名; PST 過去; REAL 現実法; RESL 結果; SEQ 継起; SG 単数; SFP 文末助詞; TOP 主題; HS 伝聞

参考文献

- Cornyn, William S. (1944) *Outline of Burmese Grammar*. Bertimore: Linguistic Society of America.
- Cornyn, William S. and D. Haigh Roop. (1968) *Beginning Burmese*. New Haven: Yale University Press.
- 李文子 (1979) 「朝鮮語の受身と日本語の受身 (その一) — 「もちぬしの受身」を中心に—」『朝鮮学報』 91: 15–31. 朝鮮学会.
- Judson, Adoniram. (1883) *Grammar of the Burmese Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- 加藤昌彦 (2008) 「ビルマ語発音表記の一例」 ms.
- Keenan, Edward L. and Matthew S. Dryer. (2007) Passive in the world's languages. In Timothy Shopen ed., *Language Typology and Syntactic Description*, vol. I: Clause Structure, 325–61. Cambridge: Cambridge University Press.
- 工藤真由美 (1990) 「現代日本語の受動文」『ことばの科学』 4: 47–102. 東京: むぎ書房.
- 松下大三朗 (1930) 『標準日本口語法』 東京: 中文館書店.
- Nishi, Yoshio. (1998) The development of voicing rules in Standard Burmese. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 23.1: 253–60.
- 仁田義雄 (1992) 「持主の受身をめぐって」『藤森ことば論集』 354–23. 大阪: 清文堂出版.
- 生越直樹 (2008) 「朝鮮語における「所有者受動」をめぐって」『日本言語学会第 137 回大会予稿集』 300–3.
- 岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ (ミャンマー) 語文法』 東京: 国際語学社.
- 岡野賢二 (2009) 「ビルマ語の受動表現に関する覚え書き」『語学研究所論集』 14: 125–40. 東京外国語大学語学研究所.

- Okell, John. (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. vol. I. London: Oxford University Press.
- Okell, John and Anna Allott. (2001) *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. Richmond, Surrey: Curzon Press.
- 大野徹 (1983) 『ビルマ語常用 6000 語』 東京: 大学書林.
- Sawada, Hideo. (1995) On the usage and functions of particles *-kou/-ka*. in colloquial Burmese. In Yoshio Nishi, James A. Matisoff, and Yasuhiko Nagano ed., *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*. 153–87. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 澤田英夫 (1999) 「ビルマ語文法 (1 年次・2 年次)」 (1998 年版の補訂版) ms.
- Shibatani, Masayoshi. (1985) Passives and related constructions. *Language* 61: 821–48.
- Shibatani, Masayoshi. (1990) *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Soe, Myint. (1999) A grammar of Burmese. Ph.D. dissertation, University of Oregon.
- Stewart, John A. (1955) *Manual of Colloquial Burmese*. London: Luzac.
- 梅谷博之 (2008) 「モンゴル語における「所有者受動」をめぐって」『日本言語学会第 137 回大会予稿集』 304–9.
- 鷺尾龍一 (1997) 「比較文法論の試み～ヴォイスの問題を中心に～」筑波大学現代言語学研究会 (編) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』 1–66. 東京: 三修社.
- 鷺尾龍一 (2008) 「「所有者受動」と受動表現の類型をめぐって」『日本言語学会第 137 回大会予稿集』 310–5.
- Wheatley, Julian K. (1982) *Burmese: A grammatical sketch*. Ph.D. dissertation, University of California.
- Wheatley, Julian K. (1987) *Burmese*. In Bernard Comrie ed., *The Major Languages of East and South-East Asia*. 106–26. London: Routledge.
- 藪司郎 (1970) 「ビルマ語の名詞の語構成について」『アジア・アフリカ文法研究』 3: 1–12.
- 藪司郎 (1992) 「ビルマ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』 3: 567–610. 東京: 三省堂.

資料

- CL (ビルマ語の小説)
- MT (ビルマ語の新聞)
- ʔəpàdǎ (ビルマ語によるラジオ劇)
- lèwínǎ (*The Catcher in the Rye* のビルマ語翻訳)
- yòçihàdà (ビルマ語の小説)

